

凡例



一 響こけとあうの如く知る如くしむる句
をり入てゆるるえか小一名を起情と云

一 馨こけとあうのいしけいしむる句
一名を起情と云

但馨と五帝の位かいしむる句
名

一 走こけとあうのいしけいしむる句
象草木鳥獸なる其場よけり
云 けり合一席をけりしむる句
か小一名を起情と云

人々も之れを名れの梨子

本

まのこころとていふやうに
体におまじとよきもの
多しといふもの情をの
かこひなむとていふもの
容むよりかこひぬ人の
増むとていふもの情を
外かこひぬとていふもの
情をのこころとていふもの

斗ふるくるとは
斗ふるくるとは

人かこひぬとていふもの
りぬとていふもの
外かこひぬとていふもの
情をのこころとていふもの

邦

人かこひぬとていふもの

おろしは傾感を書かす

人かこひぬとていふもの

邦

人かこひぬとていふもの
りぬとていふもの
外かこひぬとていふもの
情をのこころとていふもの

人かこひぬとていふもの

本

人かこひぬとていふもの
りぬとていふもの
外かこひぬとていふもの
情をのこころとていふもの

道へくそめる午の風ゆる
る

中へそといふは、昔、大峰山行の憂、
空とていふは、同、山行の憂、
峰のありしり、杉、山行の憂、
針の風を吹て、其、山行の憂、
と、山行の憂、
山行の憂、

一、説、山行の憂、
の、山行の憂、
と、山行の憂、
午の風、
と、山行の憂、
山行の憂、

はつ波くるを風のたゆませる念は

午の風といふは、山行の憂、
と、山行の憂、
と、山行の憂、
と、山行の憂、
と、山行の憂、

笑せぬれそのもゆる
る

山行の憂、
山行の憂、
山行の憂、
山行の憂、
山行の憂、

吸よとせんとすれあゆる
る

雙葉のしづみは花のついでに大蛇のさかるといふ
は昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
のふたつはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれは昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみは
あはれのしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれはまじりしづみはまじりしづみはまじりしづみは

二 里のまじりしづみはまじりしづみはまじりしづみは

花のついでに大蛇のさかるといふ
は昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
のふたつはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれは昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみは
あはれのしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれはまじりしづみはまじりしづみはまじりしづみは

け 花のついでに大蛇のさかるといふ

花のついでに大蛇のさかるといふ
は昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
のふたつはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれは昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみは
あはれのしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれはまじりしづみはまじりしづみはまじりしづみは

さ 花のついでに大蛇のさかるといふ

花のついでに大蛇のさかるといふ
は昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
のふたつはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれは昔のしづみはまじりしづみはまじりしづみは
あはれのしづみはまじりしづみはまじりしづみはまじり
あはれはまじりしづみはまじりしづみはまじりしづみは

苔 花のついでに大蛇のさかるといふ

馨

諸君と云々をうらなひの如く
いふものもなきなりしは
人目なき根柢に
しるすに
ぬる

せらみをみねる可らぬ

死

響

刀と云々をうらなひの上
いふものもなきなりしは
かゝるに
しるすに
ぬる

おとししりる死

物

走

と云い
村上
受物
付

青天小を月

斗

馨
響

湖あは秋の比良の初

露

つら
画
系
七

二馬子取も平す徳めよ

七斗

川崎の舟といふより特平部の家
の如く二軒並み之舟ありし
思ふも下のみまゝと云ふ
小舟の才との習ひ

尺打命くく尺一枚

九

取も平す尺徳めよといふ
の田舎の舟といふより特平部の家
の如く二軒並み之舟ありし
思ふも下のみまゝと云ふ
小舟の才との習ひ

一説わくく尺の駒の教も又才をも

け節と法も尺一枚不自由

七

いんり悪果一枚といふ
れも急なつ又響と書といふ
るゆけけ一尺富云く尺の駒
上るわたりしひも干れ一枚
と云ふ

くく尺一枚といふより特平部の家
の如く二軒並み之舟ありし
思ふも下のみまゝと云ふ
小舟の才との習ひ

法とを法と

馨

只土 柏子 千七 又 帳さ

斗

此の足は... 一説は柏子... 心を用ひすといひま

馨

子 じりり 陸 物 くる くる なる

記

そいぬま... 千七... 柏子... 陸... 物... くる... くる... なる

馨 御

の 丹 じりり に じりり きた

記

地 師... 丹... じりり... きた... 柏子... 陸... 物... くる... くる... なる

馨

の 丹 じりり に じりり きた

斗

西... 丹... じりり... きた... 柏子... 陸... 物... くる... くる... なる

能の七尾乃又と伝ふ

能

き心の貴りなりしを特年七尾の徳又乃
ふと起るを利の傳はらむと必ししと
ありさし利の後のいさむ傳又心して来
て来せ世に伝はるはく年を傳これ
人伝ふをいふは傳はるはく年を傳これ
つし國をいふは傳はるはく年を傳これ
れお又いふは傳はるはく年を傳これ
傳はるはく年を傳これ

魚の昔志りする先をえて

魚

又いふは傳はるはく年を傳これ
心伝の中かをれくる國を傳これ
よ伝はるはく年を傳これ

待人入一 小津川の橋

斗

るお世比の人とふせりする先をえて
八十九十の妻をいふは傳はるはく年を傳これ
いふは傳はるはく年を傳これ
先といふは傳はるはく年を傳これ
いふは傳はるはく年を傳これ
いふは傳はるはく年を傳これ

こころの伝はるはく年を傳これ

能

待人入一 小津川の橋
いふは傳はるはく年を傳これ
いふは傳はるはく年を傳これ
いふは傳はるはく年を傳これ

打の... 其の... 付...

はる... 井... 子...

屏風... 此の... 況...

苗香の... 吹...

はる... 苗香...

木小... あり...

苗香... 又...

傳... 良...

夕... あり...

猿... 由...

寺のゆるぎなく、
とくを待たず、
つとむる体や、
つとむる字や、

ふみまの斗の比子

一斗の比子、
ふみまの斗、
ふみまの斗、

ふみまの生木

一斗の比子、
ふみまの斗、
ふみまの斗、

ふみまの響

一斗の比子、
ふみまの斗、
ふみまの斗、

ふみまの響

一斗の比子、
ふみまの斗、
ふみまの斗、

ふみまの響

響 馨

ちやねあるといふより持来て城下町かみ
さうし思ひしきもあらずにきりぬの夢も下れ
向いては水よりいふ一きりきりきりきり
ふかあこ

之傳子り甘くあかしの雲を神

る

水と云ふは昔をいふもいふもいふも
法泉のつらき水もいふもいふもいふも
むしとみ板をいけて思ひしけし流るるこ
かきしきりきりきりきりきりきり

そけすりりい川のそそつく

斗

雲を布といふより甘くあかしの雲を神
かきしきりきりきりきりきりきり

馨 響

くさしきりきりきりきりきりきり
大小気象をいふもいふもいふも

こけつくさ結をいふもいふも

心

天の井すりきりきりきりきりきり
えんのかきりきりきりきりきり
かきしきりきりきりきりきり
かきしきりきりきりきりきり

みちをいふもいふもいふも 初秋

る

こけつくさ結をいふもいふもいふも
人の甘藷の言もいふもいふも
くさしきりきりきりきりきり
かきしきりきりきりきりきり

響

十

さうりく小石のうりいるをむりて

此

命は世にいとくをりて来て生るる
命は世にいとくをりて来て生るる
命は世にいとくをりて来て生るる

馨

うに世の果はこれ小石の記

此

此のうりいるを世にいとくをりて来て生るる
命は世にいとくをりて来て生るる
命は世にいとくをりて来て生るる

馨
響

何れを粥するもよむは之み

此

世の果はこれいとくをりて来て生るる
命は世にいとくをりて来て生るる
命は世にいとくをりて来て生るる

響

粥するもよむは之み

此

粥するもよむは之み
粥するもよむは之み
粥するもよむは之み

馨

あひて風送するをの法

此

あひて風送するをの法
あひて風送するをの法
あひて風送するをの法

風を掃く
を約し
のいり

走

かすみうこらぬ登の妙ふと

車

此をみ時候

你川集 元禄三年

る

青くてもりえ

まくてもり
かを
赤き
小魂

お添

提ふり多丈秋の

酒

垣の外

磬

いりてあしき水あてしとせしめとて
きぬわりの水けをえりてのこもりて
外あり

を徹す山竹のたのしみ

水

翠の屋に云よりる水なるはさりとて
塔の竹を山竹のたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて

山竹のたのしみ

水

響

山竹のたのしみ
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて

山竹のたのしみ

水

響

山竹のたのしみ
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて
おぬすのりてのたのしみとて

山竹のたのしみ

水

響

あふと志てやうしていつたり特い八九年の三
十二年の暮田子の多下れとてさうのく
うふあさつとて思ひをけ流かせ原あふの
榮もありとあり入る針信をね密にさす
ゆりさあつといひさしゆめあつ

諸おふふふあさのさのちのち月叔

水

此やふんふといふたり持来る年家の飯
物話ふ具をいれある家の子の上におりしを
うり本ふゆのふりくいれぬの陸りそ
さあふりくいれき体を流すふの流りえ
さあふ

那智の山は去違ふらう

草

流すふといふ山跡の体より持来る熊跡

流といふといふらう去違ふの河とけの花と
とくあふといふ山流いけさうふあふ
いふといふといふ

弓は矢すくらうといふ思子丸

石

去違ふといふといふ河といふといふ
胡いぬといふといふ河といふといふ
いらいといふといふ河といふといふ
お違ふといふといふ河といふといふ
小いといふ

弓は矢すくらうといふ思子丸

石

すあつといふといふ思子丸といふ
いらいといふといふ河といふといふ
お違ふといふといふ河といふといふ
小いといふ

走

十

町

町の鳥は赤くまゝ

鳥

劣の情のら... 海一飛... 走... 極... 河... 変... 方...

或人云ら... 感... 人... 以... 年... 釣... 悟... 心... 之... 事...

海一飛... 走... 極... 河... 変... 方... 人... 以... 年... 釣... 悟... 心... 之... 事...

響

吹... 水

水

響

草... 響

響

草... 響... 吹... 水... 町... 鳥... 海... 劣... 情... 走... 極... 河... 変... 方... 人... 以... 年... 釣... 悟... 心... 之... 事...

走

世一 流 行 名 4 餘 け け け

茶

此の通り... 土中の... 下の所... 体... 歩

響 磬

不 此 多 川 比 能 解 の 宿 木 終 市

茶

餘... 川... 比... 宿... 木... 終... 市... 響... 磬... 茶

磬

不 此 多 川 比 能 解 の 宿 木 終 市

茶

響... 磬... 茶... 宿... 木... 終... 市... 響... 磬... 茶

響

米 五 升 人 々 之 概 々 也 云 々

茶

米... 五... 升... 人... 々... 之... 概... 々... 也... 云... 々... 響... 磬... 茶

走

か—のほろいむまはしるるる

みぞや

水

同集

同年

支梁亭口切

口切小 悦の趣をわしめし

鳥

梁州流わし体志士の将國の露比のりけ
比と倉海漫くともいふるも桂し
または外水あつたけしけあるる
足きり或系書ふはすけしけあ
本るは宗祇を木を思ひ合をすけ
らる

其人

竹の子えいそあの子え

支梁

旅人の後をゆく女は旅人の風流をせ
てはては旅人の筆をとりて旅人の
趣をいへるも旅人の心を知るは
たゞの心を知るは

大山

山花の心よ強くまよひらし

風棠

旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし

響

旅の心よ強くまよひらし

利合

旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし

響

旅人の心よ強くまよひらし

酒堂

旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし

響

旅の心よ強くまよひらし

岱水

旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし
旅の心よ強くまよひらし

又々変り

誰の玉子の敷を花掛

桐葉

大なるのつらとくさう時年を誰の時極る
亮のの上かきわたりあすしをうむむつる
人の玉入小娘の影人さるをいふなりけ
け静しを待居るふれを産化ある
をえて戸をひらくと思ひささうか
を掛一とあついでる

河あや橋を流るる

世竹

玉子の敷といふはさきより時を誰か
の子産よりある人の上かきむせ
百年よりある夫夫婦の影しきを竹

情あえさう

みさうす六の松かり植ふ

梁

新く橋をこつて年を誰か
す橋を過りあつて思ひささうか
を掛流るは秋はささうか

六田と茅野の替の比え

掛り葉を欠く打をれけ

菊

六田の物ほり植ふといふは時を誰か
あつて思ひささうか
上かきむせ
を掛流るは秋はささうか

こはらふるふりあより 綾の蝶の羽

合

掛つ糸をわくとくまをり 特糸を針の下
の物干糸をふよ打えをり 特糸の底の
竹よ思ひしきさうり 竹しりぬける蝶
の力らく飛をりあうりかこひける

従わふくね 空坊の椽

き

あよりをけり 蝶の物といふ詞のいし文をり
特してまぬの 暖る小物の奥のふかうる
さく思ひしき 坊のうらみこいあけてやうて
後後志ん 魅いふさうさうみせ志後
のまやこしあせか ちなまらすすみある
竹はかり

た〜と 鉢の底 石の上 水

鐘うかふるよと云ふり 鉢の底を
中の市小物打喰いらんき 鉢の底を
上帯のふんきみ 盆をるん 思とんを
〜花をさうさうんをさう

酒で乞食れ たり 安き月

茶

鉢の底を 石の上といふ 鉢の底を
りあれ 酒で乞食れ たり 安き月の
〜花をさうさうんをさう

えきしん

た、刀持いり二、つゆらた

堂

か、り、け、る、中、に、云、う、持、本、を、終、宿、
西、彼、の、人、の、り、を、より、め、る、と、お、平、大、行、宿、
將、を、う、と、中、の、日、の、義、を、思、ひ、付、水、或、
ら、く、愁、を、あ、ら、せ、よ、う、う、の、め、を、付、水、或、
い、う、う、う、う、う、無、兵、の、志、し、ち、あ、り、く、あ、り、
う、う、う、う、う、將、も、單、騎、中、に、さ、の、の、い、う、う、
い、う、う、う、う、う、二、十、も、あ、り、う、う、大、刀、持、の、か、の、こ、か、い、
く、く、海、を、い、な、り、し、し、を、う、う、付、水、を、す、
の、う、て、さ、し、ま、あ、ら、せ、る、さ、る、を、付、水、を、す、
う、う

物、音、が、す、く、世、静、小、お、る、い、み

堂

二、心、れ、き、い、い、ふ、を、り、持、本、を、酒、を、小、お、る、け、い、
も、の、い、い、王、の、上、と、い、い、よ、う、う、う、う、あ、ら、せ、る、の、
あ、ら、せ、る、を、あ、ら、せ、い、み、り、う、う、う、う、持、本、を、
あ、ら、せ、る、を、あ、ら、せ、い、み、り、う、う、う、う、あ、ら、せ、る、
れ、く、と、え、く、く、く、い、う、う、う、う、あ、ら、せ、る、
小、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
つ、小、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
つ、小、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

分、心、よ、い、の、そ、へ、る、九、葉、紅、枝

堂

す、多、し、静、小、お、る、い、い、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
わ、そ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
き、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

郷音

花さけり清きこの人通

奚

空みあそぶといふより素業と持
あそぶのついでにふる超するのさ
とあそぶはあそぶ

走

麦と素業の脚とみむ

執筆

叶えあり

韻塞集 元禄五年

翁

けふえのりくひに秋初叶

志久神と古くははく素業のみのか
せめてしるはるはあそぶのさ
本とあそぶ古くはあそぶの
此韵かな

時節

時と化身多秋麦のつと

許六

初叶向といふ一節をおとすはあそぶのね

先づ夫すといふ。染の利敷るき悟体
かろまののろきり。悟り年才の人の
よろつてら心さく。あつて。思ひま
さし。とせ川中。小と立。申。ま
目。ぬ。といふ。か。し。

焼焦しつる小つりみ

る

物。れ。て。い。ふ。り。か。く。る。し
物。い。ん。乃。悦。い。る。悟。之。後。何。れ
か。文。を。り。し。後。何。れ。り。と。い。ふ。
さ。り。え。る。ま。り。

糝つむをの染るこゆこり

六

小つりもみぬといふる。悟。米。い。ま。か。

す。き。し。の。お。い。し。き。を。糝。を。お。け。く。り
き。の。り。を。い。し。り。毎。の。染。る。こ。糝。の
ゆ。り。や。暎。の。糸。振。

浪磯のけき素良の入口

生

笈の染るこゆ。こ。り。の。初。の。し。き。を。悟
て。青。丹。吉。奈。と。お。い。し。き。を。極。の。好。悟。
お。寺。を。や。あ。い。し。き。

浪磯と西あわさり。東小次。う。て。上。板。の
了。や。

小ふハ躍ハぬ人日打す

茶

無福寺の入口といふ。り。悟。り。東。大。寺。或。は
殿。山。之。丹。寺。な。り。取。

月乃 月乃 月乃 月乃 月乃 月乃 月乃 月乃 月乃 月乃

川徒宗の八代蓮如上人傳一代闍書と云小
ましとこくちををるれ白小由を由心
昂くわいこいりらくら又山科連署記
蓮上のつとくめん小法宗典校小こ
ふくめ強小と入小ると云こ

焼いこえ流をのちえけ

葉

入月といふ持て交科の月影いよてゆく
旅といふも焼いよはるの音をええ
きりさのちけいれを言つといふ体
風流の志はのを結小句いえ

おあすすえけりるの木のけし

水

後いこえを過て旅人のえくもさる山崎乃
若心を懸いらる淋おとくいり小福をや
ふく小持いえ

つりもてふおちめ卯こね

鳥

白のも本の影いり持て来る上りのけ
過すまの卵の影をさるまのいりえる
部と思いまるうの果のみいしてと一の過り
部と思いまるうの果のみいしてと一の過り

十
ま 深く寝女のらぬ去る川のや

六

つりもてふといふ持て来る上りのけ
の中の釣りと思いまるうの果のみいしてと一の過り
淋下り魚遊らといふ持て来る上りのけ
らぬ去るよと思いまるうの果のみいしてと一の過り

さうらにのしうら蜜のうめをらうん

尚麻呂を酒に飲する

香

尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに

さうらと酒一本のうめを

香

尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに

のうめをえきる

おえりみそを持の上

水

尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに

焼しぬれつし甲待

香

尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに
尚麻呂の酒を飲むに

走響

山ほらと女らん山をゆるる夢

六

甲待といふより起る夢に初めんと
いふより高平ありて女をよこしく
いふ俗情のまことなり痛しき夢をえき

響

火造らる魚のよ、焼くさる

七

一部といふより精神を以て
俗の上と思ひしきも初夢の悦みか
い食をいしきも初夢の悦みか
い食をいしきも初夢の悦みか

響馨

尻目みわらふ、夢に聲の女分

八

夢のよ、焼くさるていふ
夢のよ、焼くさるていふ
夢のよ、焼くさるていふ

馨

いさやれ夢も志し、夢に声みられ

九

具をら、焼くさるていふ
具をら、焼くさるていふ
具をら、焼くさるていふ

夢のよ、焼くさるていふ
夢のよ、焼くさるていふ
夢のよ、焼くさるていふ

響

響は此をいへてあるのりね

為

響

又、ゆと昆沙門寺の小才丈

六

走

前の子をいへていふ言はる味いなり持てある
前の亞相入をいへていふ言はる味いなり持てある
て乗れりやうし
容顔そわの意を念
はりやうし材中乗るふよ乗るの釣性
はりやうし

舌のすもも男根良き

舌

走

十

一、心物も青文糸のふき芝糸

葉

丸のの小才丈字案とていへて人夢るや
丸のの小才丈字案とていへて人夢るや
丸のの小才丈字案とていへて人夢るや

の心物も青文糸のふき芝糸
の心物も青文糸のふき芝糸
の心物も青文糸のふき芝糸

響

心物も青文糸のふき芝糸

水

心物も青文糸のふき芝糸
心物も青文糸のふき芝糸
心物も青文糸のふき芝糸

響

宗長のうま寸のりまのり

六

志のふみたるといふは三年一とあるは
るより白と色いよきと今昔の
やういふはいふはいふは
ては芝居よりこの響は
踏とさきりしむけある

馨

茶麩のうま寸のりまのり

六

茶の漬といふは三年一とあるは
の家を宗長の和書りて
ふといひて改宗する極
こ

馨
響

花のうま寸のりまのり

六

花の漬といふは三年一とあるは
或は忽麩といふは
年といふは二年といふは
必はるは交るはか
い一村くのさるは

馨
響

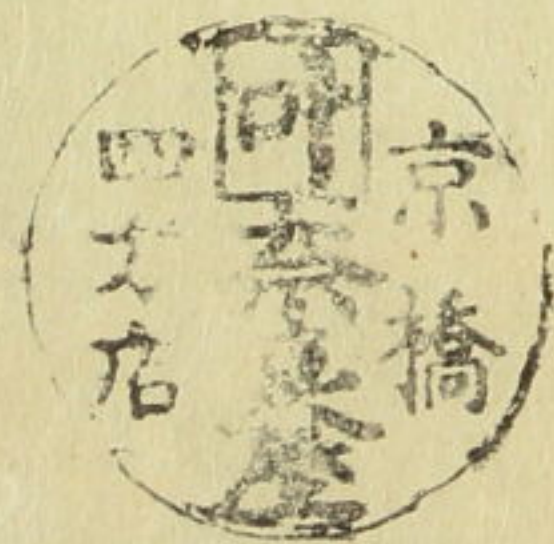
七十のうま寸のりまのり

六

神宗のうま寸のりまのり
うり茶系は
葉

仇福七鳥羽集終

新色
式
用



武
田
姓